

国境の島を守り続けた 「無名の防人」

さきもり

10人の物語

9 沖ノ鳥島保護に1億 寄付した坂井溢郎

東京都の沖ノ鳥島も、領土問題に直面する島のひとつである。島の大半が海面下であり、地球温暖化に伴う海面上昇で島自体が水没の危機に直面したため、政府は1988年にコンクリート護岸工事等で島を保護した。しかし近年、中国は、「島ではなく岩であり、排他的経済水域には当たらない」と主張し、近海で海洋調査を強行している。

そうした現状を見かねた元水産庁職員の坂井溢郎は、06年に東京都庁を訪れ、「沖ノ鳥島の保護のために役立ててほしい」と石原慎太郎・都知事に寄付目録を手渡しした。その額、なんと1億円である。

「水産庁時代に漁港建設に携わり、沖ノ鳥島周辺の漁場や、資源埋蔵の可能性から重要性を感じていました。ところが管轄する都は離島に開発の予算を付ける理由

中国人の尖閣上陸に抗議して、10人の日本人が尖閣諸島に上陸した。政府の無為無策に対するやむにやまれぬ抗議である。

しかし、領土を守る行為とは、その土地に日の丸を掲げ、「ここは日本領だ」と叫ぶことだけではない。むしろ、名もなき市井の人々がその土地に築いてきた生活の営みこそ、「日本領土」たる揺るぎなき根拠である。日本領土を静かに守ってきた人々の記録を、今こそ知っていただきたい。

がなく苦慮していた。ならば自分が寄付し、動くきっかけになればと思います」
資産家でもない坂井が1億円という大金を投じたのには、もう一つ理由があった。彼は日本大学理工学部在学中、海軍委託学生となり、多くの仲間たちを戦地で失っている。

「戦地に行った私の仲間たちは『国を守る』という純粹な想いで死んでいききました。節約で貯めたお金で迷いもありましたが、戦地の友人に比べたら楽をしたものだ、と思ったのです」

大金を投じたことには当時新聞も騒いだが、「80歳過ぎて有名になりたいなんて思わない。ただ世の中の役に立つてもらえればいい。それだけなんですよ」とそっけなかった。

(週刊ポスト・小学館 発行
第四十四巻 第三五号
平成二十四年八月二十七日発売
より抜粋)